楠で育てる９年間の「学び」と「育ち」

～主体的に学ぶ児童の育成（国語科を中心として）～

宇部市立万倉小学校

１　はじめに

本校は宇部市の北部に位置し、北には城山がそびえ、南に有帆川が流れる自然豊かな地域にある。校区内には伝統工芸品「赤間硯」の里があるほか、ブランドなす「万倉なす」の生産地としても有名である。そうした恵まれた環境のため、三世代同居の比較的落ち着いた家庭が多く、学校教育活動にも協力的な地域である。本校は、昨年度より完全複式学級編成となり、１・２年生７名、３・４年生１３名、５・６年生１０名の３０名が在籍している。

「地域を愛し、人を大切にする子どもの育成」という学校教育目標を掲げ、主体的に学び活動する子どもを育成することを重点目標にして取り組んでいる。

２　研究主題

本校の児童は、素直で優しく、落ち着いて学校生活を送ることができる。学年を問わず仲がよく休み時間には一緒に遊んだり、縦割り班掃除では上学年が下学年に掃除の仕方を優しく教えたりする姿が見られる。また、学習に対しても真面目に取り組み、とりわけ学力が高いわけではないが、どの子も平均的な学力を身に付けている。しかし、素直さゆえに指示待ちの子が多いことも本校児童の傾向として見られる。言われたことには真面目に取り組もうとするが、自分から主体的に取り組もうとする子が少なく、他者より目立つことに抵抗感を持つ子が多い。また、自分の思いを言葉にして伝えることが苦手で、困難なことに直面するとすぐに教師や保護者に助けを求める傾向がある。学校運営協議会において SWOT 分析をした際も、固定的な人間関係の中で育ってきたことで、競争心がなく、自ら進んで挑戦しようとする姿勢や創造性が乏しいことが課題として挙げられた。

そこで、研究主題を「主体的に学ぶ児童の育成」とした。ここでの「主体的に学ぶ児童」というのは、知りたい、分かりたい、伝えたいなど「～したい」という思いをもち、自分から積極的に人・ものに働きかけていく姿である。今年度は国語科を中心とした研究を進めることで、児童の主体性の育成を図りたいと考えた。

（研究仮説）

> 学び合いや発達段階に応じたリーダー学習を土台にし、相手意識・目的意識を児童が自覚することで、主体的に学習に取り組む児童を育成することができるのではないだろうか。

３　研究の内容

（１）３つの視点による「主体的な学び」の意識化
（２）リーダー学習の充実
（３）学び合いのある授業づくり
（４）ＮＩＥ教育の推進
（５）読書活動の推進
（６）学校・地域連携カリキュラムに沿った地域学習
（７）楠中校区での小中一貫教育の推進

４　具体的な取組

教師自らが「主体的な学び」を意識して取り組むために、３つの視点で授業改善に取り組んだ。３つの視点は以下の通りである。

視点①　相手意識・目的意識を持ち続ける単元計画	視点②　本時のめあてを意識した学び	視点③　自分の学びを自覚する振り返り活動の充実
・「国語で身につけたい学習の力」の自覚化 ・子どもがわくわくするエンドポイントの設定	・エンドポイントとのつながり ・めあての提示の仕方の工夫	・振り返り「な・す・び・🔍」の充実 ・学びの姿を自覚させたり、学びを共有したりさせる

また、今年度「国語で身に付けたい学習の力」と「リーダー学習で身に付けたい学習の力」の一覧を作成した。「国語で身に付けたい学習の力」は、学習指導要領と楠中学校区9年間の学習系統表を参考に児童にどんな力を付けたほしいのかを検討した。作成したものは、児童と共有することで主体的な学びにつながるのではないかと考えた。

さらに、単元計画を立てる際に、評価規準を明確にし、どこの学習活動で何を評価するのかを精選して設定した。また、教師が「おおむね満足できる」B評価の姿を具体化し、どの学習活動でどんな力を身に付けさせればよいのか、また「努力を要する」C評価の児童にどのような支援をすればよいのか考えた。

（１）１・２年　国語科

<u>１年「じどう車ずかんをつくろう」</u>

<u>２年「馬のおもちゃの作り方」「おもちゃの作り方をせつめいしよう」</u>

１年生は、「じどう車くらべ」で学習した「しごと」と「つくり」の関係性を活用して、今度は自分たちで、幼稚園のみんながわくわくする自動車を選び「万倉小わくわくタブレットじどう車ずかん」を作ることに取り組んだ。自分で選んだ「しごと」と「つくり」は、幼稚園児がわくわくするだろうかという視点をもち、自分の考えを伝え、友達の意見を聞いたり質問に答えたりする対話を通して、自分自身で「しごと」の特徴となる「つくり」を選んだ。そして、「しごと」に合った「つくり」の働きや目的の順で、文章を書くことを意識した発表ができた。

２年生は、「馬のおもちゃの作り方」で見いだした説明の仕方や工夫を、自分が選んだおもちゃの作り方に活用して、幼稚園児に作ってもらう説明書を書く活動に取り組んだ。幼稚園児のみんなが分かる言葉を使っているか、作る順序はよいか、文と写真は合っているかという視点をもち、実際におもちゃを作りながら説明書の推敲を行った。友達からの意見をタブレットにメモしたり、幼稚園児に分かりやすい言葉になるように辞書を引いて調べたりしながら、説明書だけで幼稚園児のみんながおもちゃを作れるのかを意識した対話を重ね、学習を進めていた。

（２）３・４年　国語科　<u>３年「すがたをかえる大豆」　４年「世界にほこる和紙」</u>

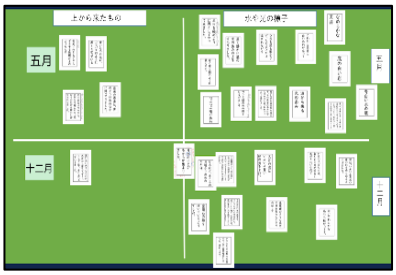
３年生は、説明文「すがたをかえる大豆」を学習した後に、「ALTの先生に万倉で作られる米・麦のひみつを伝える」というエンドポイントを設定した。

そのため、「すがたをかえる大豆」を通して、例の順序性や写真の使い方などの説明の工夫について考えた。教科書と教師の自作した説明文を比較しながら、子ども達は、写真があることの良さや例の数について、友達と話し合うことができた。また、例の順序性について考える活動では、「知っている順」「すがたをかえる順」など自分たちなりの考えを導き出した。読み手を「驚かせたいのではないか」という筆者の意図を考えながら、読み深めることができた。

４年生は、説明文「世界にほこる和紙」を学習した後に、「万倉に来た誰にでも赤間硯の良さが伝わるリーフレットを作る」というエンドポイントを設定した。子ども達にとってリーフレットはなじみがないので、はじめに「世界にほこる和紙」の説明文を通して、和紙の良さを伝えるリーフレットを作る活動を行った。本時では、文章全体を２００文字で要約するという課題に取り組んだ。予習で一番大切だと思う文章を選ぶように促しておくことで、自分の考えをもって、グループでの話し合いを行うことができ、スムーズに要約が進んでいた。また、ロイロノートを使って、常に文字数を確認できるようにしたため、大切な文章だけではなく、必要な文を付け足しながら自分たちの力で完成を目指すことができた。

（３）５・６年　国語科　<u>５年「たずね人」　６年「やまなし」</u>

５年生は、「広島市へ行けなかった６年生に『平和記念公園』紹介プレゼンを作ろう」をエンドポイントとしプレゼンシートを作る活動に取り組んだ。本時の学習では、４枚目のプレゼンシート作りであったため、子ども達は、容易にめあてを確認し、場面の紹介を考えることができた。また、場面の紹介については、これまでのプレゼンシート作りで学習を繰り返しており、予習として全員が事前に意見を考えていたため、活発に話し合い、場面の紹介文をつくることができた。平和記念公園へ行く前と行った後で、中心人物である綾の心情がどのように変化していったのか、教科書の挿絵や本文などを手がかりに考える活動を行った。それによって本文中にある「きれいな川」「ただの名前」という作者の工夫した表現に着目し、考えることができた。



６年生は、「『幻灯シート』を作って吉部小学校６年生と学習で学んだことを共有しよう。」をエンドポイントとして取り組み、本時の学習も見通しや意欲をもって学習に臨むことができた。単元の導入場面で、吉部小学校の６年生と遠隔授業を通して、共通の学習のエンドポイントを確認し、単元の最後に交流するとしたことが、学習意欲の喚起につながった。また、本時では、前時で子ども達が教科書中から見つけていた「作者独特の表現」を、シンキングツールで操作する活動を行った。センテンスカードを、「五月」や「十二月」、「上から来たもの」や「水や光の様子」について右図のように分類していくのだが、視覚的に考えを整理しやすいため、活発に話し合うことができた。複数のセンテ

ンスカードごとに議論を行ったため、教師の支援が必要だったが、５年生の場から離れられなかったため、本時のもう一つの主活動である「なぜ筆者は、「十二月」にしか出てこない「やまなし」を題名にしたのかについて話し合う」ことに、十分に時間をとることができなかった。

５　成果と課題

（１）成果

・ 主体的な学びを生み出すために、相手意識・目的意識を単元のエンドポイントの中に取り入れることで、学んだことを伝えたい、見せたい、楽しんでもらいたいという学習意欲を高めることができた。
・ 本時のめあてを意識するために、めあてに向かって学ぶことで「何かいいことがあるか」を考えてから学習に臨むようにした。そのことによって児童に「やらなければならない」という意識が生まれるようになった。
・ 振り返りは、一人ひとりが本時の学習のめあてやエンドポイントとキーワード「な・す・び・🔍」を効果的に結びつけることができた。また振り返りのデータ化により、学びの足跡を想起できた。
・ 「国語で身に付けたい学習の力」は、単元計画を立てる際に、どの力と関わりがあるのかが明確になった。「リーダー学習で身に付けたい学習の力」では、教師が児童の良い姿を価値づけるための指標となった。いずれも、児童と共有することで、年間を通したそれぞれの学習の力を継続して培うことにつながった。

（２）課題

・ 本時のめあてとエンドポイントを結び付けることが難しい場面があった。単元を通して身に付けたい力が生かさせるようなエンドポイントを設定することが必要である。
・ 本時のめあてにせまり学びを深めるためには、教師の支援が不可欠である。しかし、複式学級ではタイミングよく支援に入ることが難しいことが多々ある。そのような場合でも、児童の思考が止まらないように、児童だけで学びを進めることができるように、普段からいろいろな学習方法を指導しておく必要がある。また、教師自身も、指導することを絞り、児童を見守ることも必要である。
・ 振り返りの共有の仕方について工夫する必要がある。友達の振り返りに対して質問や意見を言うことで、本時のめあてやエンドポイントにせまる学習の深まりを目指した振り返りができるようにしたい。

６　おわりに

３つの視点で授業改善を進めることで、分かりたい・分かったことを伝えたいなど児童が主体的に学ぼうとする姿が見られるようになった。授業を参観された方からも、「児童が生き生きと学ぶ姿が見られた。」という意見をいただいた。また、本校が取り組んできた３つの視点については「相手意識・目的意識をもつことが、児童の主体的な学びにつながっている。」、「単元のゴールをイメージできるエンドポイント設定の大切さを改めて感じた。」「学びをデータ化しているので、これまでの授業内容を振り返ることも容易になっていた。」などの意見をいただいた。今後は、本研修会で得られた課題の解決を目指してさらに研修を深め、主体的に学び続ける姿を基盤に深い学びを探究しようとする児童を育成していきたい。